

大学教育開発センター通信

WINTER
Vol.8
2005



大学教育開発センターでは、特に重要と考えられる3つのテーマを掲げ、指定プロジェクト研究を実施しています。その一つ「教育評価」（他に「成績評価」「導入教育」）では、大学教育の改善に資するために、より有効な学生による授業評価調査（授業アンケート）の構築と活用方法について研究しています。本学のこれまでの蓄積にとどまらず、他大学の状況についても聞き取り調査等も行い、教育評価に活かせる調査の研究をしています。

去る11月18日には深草学舎で坪井和男氏（中部大学大学教育研究センター長）、大塚雄作氏（京都大学高等教育研究開発推進センター教授）を講師にお招きし、公開研究会を行い、ご講演していただきました。坪井先生には「教育活動・改善表彰制度—より良い教育を目指して—」というテーマで、先進的に取り組まれている中部大学の事例をご紹介いただきました。また大塚先生には「授業の改善とアカウンタビリティ—授業評価をどう捉えるか—」というテーマで、昨今、全国の大学で行われている授業評価のあり方について学ばせていただきました。

CONTENTS

特集	大学教育開発センターとして初の試み「公開授業」と「講評会」を開催 ……2
	その意義とは 大学教育開発センター長 近藤久雄
	公開授業を終えて 社会学部助教授 田村公江
	公開授業と講評会の参加者より 文学部助教授 松尾宣昭・社会学部教授 青木信雄
他大学訪問記	……6
	一橋大学と国際基督教大学を訪ねて 経営学部教授 加藤正浩
研修参加記	……8
	「平成16年度 大学の教育・授業を考えるワークショップ」 理工学部教授 林 久夫
	「平成16年度 情報倫理教育研究会」 社会学部助教授 小黒 純
	「平成16年度 大学情報化全国大会」 経済学部教授 井口富夫
	「IT教育支援協議会 第3回フォーラム」
	高等教育におけるeラーニングの新展開 理工学部助教授 藤田和弘
FD活動紹介	……10
	キャリア支援に向けて 経営学部教授 佐藤研司
	基礎演習のクラス間での多様性 国際文化学部助教授 鈴木 滋
お知らせ	……12
	新着図書・おすすめの冊子・2004年度活動報告 ……12
	2005年度大学教育開発センター事業計画 ……13
	教員対象パソコン講習会・先生の知恵袋 ……14
	第10回FDフォーラム開催 ……15
	指定プロジェクト・自己応募プロジェクト研究報告会 ……16
	編集後記



大学教育開発センター通信 第8号

■発行日：2005年1月31日

■編集・発行：龍谷大学 大学教育開発センター
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
TEL (075) 645-2163 FAX (075) 645-2190
<http://www.ryukoku.ac.jp/fd>

■発行責任者：近藤久雄

特集

大学教育開発センターとして初の試み 「公開授業」と「講評会」を開催 その意義とは

大学教育開発センター長 近藤 久雄

■FD活動の必要性

近年FD活動の一環として、「公開授業」という耳慣れないことばを聞くことが多くなりました。耳慣れないと申し上げたのは、そもそも大学の講義は、もぐりの学生がいたり、社会人が聴講したり、はたまた面白い講義の場合には専門の違う同僚が紛れ込んでいたり等々、従来から「公開」されたものであったからです。

しかしながら、ユニヴァーサル化した現代の大学とそこに学ぶ大学生の実態を考えると、あえて「公開授業」として情宣をして授業を公開し、その後に「講評会」まで行わなければならない事情が見えてきます。すなわち、大学はもはや昔のように必ずしも最先端の高度な知識を教えるところではなくなっており、学生達もそうした知識を学ぼうという意欲と期待を持って授業に参加しているわけではなくなっているからです。このような現実を踏まえてみると、次に考えねばならないことは、大学は高等教育機関として、様変わりしてしまった現代の大学生達に何を身につけさせるべきか、またその方法はいかにあるべきかということです。言うまでもないことですが、大学やそこに学ぶ学生のこうした変化は、社会の変化に伴うものであり、学生や教員に何か非があるわけではありません。大学が大学教育のありかたを組織的に研究する必要性、いわば大学が大学の教育を自己研究しなくてはならない理由、つまりFD活動が必要となってきた理由はここにあると考えます。

■自律的な教育論議の必要性

すでに初等教育や中等教育のレベルでは、児童や生徒の心理学的・社会的分析に始まり、教育のありかたが議論されて久しいものがあります。つまり、初等・中等教育のレベルでは、教育を施される側の児童・生

徒の分析がなされ、施すべき教育の内容が明示され、そうした教育を施すいわば手段のひとつである授業の在り方が長年にわたって研究されてきているわけです。もちろん、初等・中等教育のありかた、とりわけその内容や方法については、立場によって様々な議論があることは当然でしょう。

ひるがえって、大学教育に目を転じてみますと、日本ではようやく近年になって大学教育研究の必要性が語られるようになってきたに過ぎません。実は先に述べました社会的変化を考えますと、大学教育においてもこうした研究がなされねばならない状況が生まれていると考えることはさほど不思議なことではありません。

しかしながら、大学には初等・中等教育機関には無い機能と役割が社会から与えられていることもまた事実です。それは大学の持つ研究機関としての側面であります。健全な研究機関あるいは個人のレベルで言えば自律的な研究者に対して社会が保障しなければならない最も重要なものは、公共の福祉に反しない限りでの研究の自由であり自律性であります。大学が研究機関として自律性を保障されている以上、その教育についても大学は自律的でなくてはなりません。それは、大学の教育は研究と不可分な関係があるからです。このように考えてくると、大学は大学教育に関する議論を社会からの要請に安易に委ねるべきではありません。つまり、大学は自ら自律的に自らの教育を議論し研究



授業開始時間までに、レジュメとなった8枚のミニレポに対するコメントを黒板に書いている様子。



教室の一番前の机に置かれたレジュメ。

する必要があります。教員が自らの授業を同僚に公開し、教育の重要な一面である授業について、その方法や工夫を互いに研究し合うことは、大学の自治を守り自由な研究と教育を実践してゆくために意味のあることであると考えます。

以上のような考えの下に、大学教育開発センターでは、社会学部の田村公江助教授にお願いして、第1回の「公開授業」と「講評会」を行いました。

■中規模クラス(260人)での双方向授業の試み

12月2日木曜日3講時、瀬田学舎7号館講義室2、田村公江社会学部助教授担当「生命と共生」、受講者数260名、第一回「公開授業」の始まりです。テーマは「中規模クラス(260名)での双方向授業」。受講生は瀬田3学部(理工、社会、国際文化)の学生であり、1年生から登録が可能な科目です。ポイントは、レジュメを配布して講義をする形式では一方的でマンネリ化しがちな授業に、双方向性を取り入れる試みを行っていることです。具体的には、授業中に配布して書かせるワークシートと、講義について感想や考えたことをタイトルをつけて200字で作文し、宿題として提出させるミニレポの活用です。

2講時目の授業が終わり、休み時間になってしばらくすると、3講時の「生命と共生」に出席する学生が教室に集まり始めます。授業開始の10分ほど前になると田村先生も教室に姿を見せ、一番前の机にレジュメ等の資料を置きます。学生たちは各自その資料を取りに行き、自分の机についてレジュメを読み始めます。その間に、田村先生は黒板にいくつかのことばを書き始めます。前回回収したミニレポのうちから面白いもの8枚を選び、その中に書かれていることから選んだいわばキーワードなのです。やがて200名近い学生が席につき、田村先生も板書を終えて、授業の始まりです。授業は、板書したひとつひとつについて手短かにコメントや解説をつけるところから始まります。聴いていると、それは以前の講義のなかで抜け落ちていたと思われる問題であったり、補足説明であったり、あるいはこの日の講義につながる面白い意見であったり、と内容的には様々です。しかしながら、いずれの内容も以前の講義の内容を前提としたものであり、そこには田村先生と学生達の間で共通の議論の土俵が作られていることが感じられました。

ミニレポによる話は授業の頭30分ほどで終わり、やがて授業は当日の話題へと繋がってゆきます。授業終了時には前回の授業に関してのミニレポの提出が求められます。学生達は宿題として自宅で書いてきたミニレポを提出して教室を出て行き、授業は終了しました。学生の中には、授業中に宿題のミニレポを書いている



授業の様子を参観する教員。公開授業に参加した教員は8名。

学生も見られましたが、何かを書いて提出しなくてはならないということが、授業の定着あるいは文章力や思考力の育成に役立っているのかもしれません。

■講評会で深まる議論

その後場所を情報演習室に移して、「講評会」と称するいわば同僚教員達との雑談会の中では、300人を越える大規模教室で学生達の注意力を持続させることに悩まれている先生、何とかして学生とのコミュニケーションをうまく図ろうと自らも苦勞されている先生、などから具体的な細かい質問がなされました。

田村先生によると、200名を超える学生のミニレポを読むのはむしろ面白いし、中には授業に使えるものもあるということでしたが、8枚を選び出すことが結構大変な作業となるようでした。授業を参観した感想としては、ミニレポによって学生達の考えを聴くことは、いわば学生達の意識調査の役割も果たしているわけで、この授業の内容ともうまく合った方法であるように思われました。

それにしても、田村先生の労力は大変なものであろうと思い、率直な質問をしてみました。すると、こうしたやり方を行うには100名程度のサイズのクラスが適当であること、ミニレポは毎回ではなく、授業中に学生に作業をさせるワークシートと交互に提出させていること、などの工夫をされていることがわかりました。

最後に、最終成績をどのようにして出しておられるのかという質問に関しては、ワークシートとミニレポの提出回数で50%、定期試験の成績を50%で計算して最終成績にしておられるとのことでした。そして、ワークシートと定期試験とは内容的に関連があるように出題されているということでした。

講義を聴いて最終試験に合格すればパスという、従来型の受動的な授業はもはや今の学生には難しく、学生達をいかにして自分で考え積極的に授業に参加させるか、そのための工夫なり仕掛けなりは今後ますます必要になるだろうと考えさせられた公開授業でした。

公開授業を終えて

社会学部助教授 田村 公江

社会学部コミュニティマネジメント学科の田村公江です。今回、公開授業を担当しましたので、その報告をさせていただきます。

1. 公開授業初体験の記

■Before

ずばり、「不安」の一語に尽きます。正直言って、「引き受けなければよかった…」とも思いました。同僚に授業を見られるなんて、恥ずかしいのです。「こんな程度か」と思われたらどうしよう。しゃべり方や板書の仕方、教壇での身のこなしなど、自分では気付いていないけれど、もしかしたら、ものすごくヘンなのかもしれない。とにかく、不安でたまりませんでした。

しかし、いったん引き受けた以上、逃げるわけにはいきません。結局、いつも通りに授業しようと覚悟を固めました。公開授業の趣旨からしても、それでいいはずです。開き直ったような心境で当日を迎えました。

■当日

教壇から見ると見知った先生の顔がいくつか。応援してくれるような和やかなムードです。お陰で、あまり気負いなく、いつも通りの授業をすることができました。「ノリ」の度合いでいったら、80%というところでしょうか。

■双方向のシステム

ここで、公開授業に選んだ科目「生命と共生」について、簡単に説明しておきます。この授業は、内容から言えば生命倫理学で、人数は中規模。講義形式で行っています。双方向のシステムは以下の通りです。

【講義ごとに、200字のミニレポを宿題にする⇒次回に宿題を回収⇒次々回に、回収した宿題を材料にして作

成した「ミニレポセレクト8枚版」(A3の大きさ)を全員に配布する。そして、これにコメントする形で補足説明や質問への答を行う。】

ミニレポへのレスポンスが次々回になることが難点ですが、脳死や生殖技術といった生命倫理学の重たいテーマをじっくり考えて欲しいので宿題としています。このシステムで進めると、授業時間90分は、「ミニレポコメントの時間」と「その日の講義の時間」にブロック化されます。90分は聞く側にとって長い時間ですが、このブロック化によって、多少我慢しやすくなるようです。

「ミニレポセレクト8枚版」は、提出されたミニレポを全て読んだ上で選び、プライバシー保護のために名前欄を削除して作成しています。全て読むことは実は結構しんどいのですが、生の声から触発されることが多く、授業の手応えをダイレクトに感じることが出来ます。

■After

公開授業を終えてみて感じたことは、「やってみてよかった」です。講評会では、実際の授業に即した具体的な質疑応答ができました。また、私が抱えている問題を共有してもらえたことが、何にも勝る喜びでした。教室の中で教員は、誰にも口出しさせない「王様(私の場合なら女王様?)」のようなものですが、それは孤独と裏腹です。講評会は、「私は一人ではない」という心強さをもたらしてくれました。

2. 今後に向けての思い

■お客が少ない！

公開授業の際にお願いしたアンケートは7枚回収されました。講評会に参加して下さった方は、もっと少なく、センター長とセンター事務室の関谷さんを除いて2人でした。全学に案内しての結果としては、あまりにも少ない数字ではないでしょうか。公開授業の試みは、私にとっては有益でしたが、「集客力」のある企画とは言い難いようです。

■提案

お客様が少ない原因の一つとして、「自分の授業と重なっている」、「会議や出張などの校務と重なっている」、などが考えられます。教員の個人的興味に訴えるだけではなく、参加できるシステムを作ることが必要です。お客様が少ない原因を少し穿って考えてみると、「公開授業に行っても意味がない」「見に行ったら、自分も公開授業を依頼されてしまうのではないか」などがあるかもしれません。

こうした思いを変えてもらうには、とにかく経験してもらうことです。公開授業の「おいしい」ところは、実は講評会にあります。公開授業を担当することが、



講評会参加は田村先生(中央)を含めて4名。田村先生の授業準備の具体的な方法や苦労話、また、参加した教員からも具体的な悩みなどを出し合った。

校務の一つとして組み込まれてもよいのではないのでしょうか。そして、教員だけでなく事務方の同僚にも、参加して欲しいと思います。「王様（女王様）」でいるよりも、問題を分かち合える場を持つことの方が、ずっと楽しい！ 公開授業初体験者として、私はこのことを強く訴えたいと思います。

以上で、報告を終えさせていただきます。

大学教育開発センターの皆様には、準備段階から当日の段取りまで、大変お世話になりました。深く感謝申し上げます。



同じ教員同士ではあるが、授業のスタイルや方法が違う中で、田村先生の事例をどのように活かせるのかという具体的な話が展開された。

公開授業と講評会の参加者より

文学部助教授 **松尾 宣昭**

若いA君が非常勤講師として某体育大学の教養科目の哲学の授業を受け持たされた折のこと。彼は、自分が学生のところに教わった通りに、「万物の根源は水だ、とタレスは言ったとのことですよ」などとやってしまいました。それを聞くや、前列に座っていた二人の学生が、顔を見合わせて「バカじゃねえのか…」と笑ったそうです。でも、このように反応してくれるだけ好ましいと言うべきでしょう。問題は、同じ反応をもちながらも、それをそのつど押し殺しているかもしれないおとなしい学生たちです。だからといって反応の表明を強要したならば、素直な発露は不可能になります。少人数のゼミであれば、ソクラテス的問答によって、少しずつ歩んでいくことで、疑問の表明を引き出すことも可能でしょうが、多人数の講義形式の授業でこうしたやり方はできません。それでも「双方向」をなんとか実現しようというのが、今回の田村先生の試みでした。講義の最後に課される二百字のミニレポ。講義内容に関する疑問や意見などを書いて提出するのですが、先生はそれら全部に目を通し、その中から八枚を選択してそのつど印刷し、次の授業の最初の三十分ほどを使って、詳細なコメントをされるのです。なるほど、これなら講義は聴きっぱなし、あるいはレポートを書いても書きっぱなしで終わる、という味気なさが、かなり解消されるものと思われました。出席カードの裏に感想を書いてもらって、必要があれば次回の授業でコメントするというやり方を取っておられる先生はいらっしゃるようですが、田村先生の上記のやり方のように徹底したものをを見せていただいたのは初めてのことで、とても参考になりました。私も自分なりに工夫したかたちで取り入れていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

社会学部教授 **青木 信雄**

10年間の教員生活で今回はじめて公開授業という形で他の教員の授業を聴き、私にとってたいへん刺激的で得がたい体験となりました。本学で大規模クラス（330人）の講義をもつようになり、四苦八苦しているところですので、田村先生のやっておられることが骨身にしみて感じられました。

私の場合前期・週2回講義という短期集中型でテキストもあり、授業を進めやすいといえれば進めやすいのですが、こちらが手を抜くとすぐさま教室での空気がゆるみ、私語やケータイ使いがはじまります。私自身は良い講義をしたいという気持ちで、ビデオ使用やゲスト・スピーカーによる講義、課題レポートの提出など工夫をしているつもりですが、なかなか難しいのです。

一般的に規模の大きさに比例して双方向性は失われます。できるだけ少ない労力でいかに双方向性を保つかということは、良い講義のポイントの一つでしょう。

その点で田村先生は200字ミニレポを柱として双方向授業に取り組んでおられます。講義終了時、学生にミニレポ提出を求め、その中から選んだ8点を一枚のコピーにまとめ、翌週の授業で配布、コメントを述べるという形で学生への返却としています。

コメントは前回の補足を含め、当日テーマの授業集中への動機づけともなり、また、他学生のレポートを見ることで学習意欲がかき立てられます。

その他にもテキストの代わりとなるワークシートの作成と、演習や授業にはあまり出ず、レポート提出中心の学生対策としての期末試験問題の工夫など、参考になることが多々ありました。

今回の公開授業は、私自身の授業を見直す良い機会となりました。改めて田村先生に感謝申し上げます。

一橋大学と国際基督教大学を訪ねて

経営学部教授 加藤 正浩

大学教育開発センター指定プロジェクト「教育評価」（代表：理工学部助教授 中沖隆彦先生）では、現在、教育評価・改善のための「学生による授業評価調査（授業アンケート）」を主なテーマとして研究をすすめています。その研究の一環として、10月22日に大学教育開発センター事務室の関谷欣也さんとともに一橋大学と国際基督教大学を訪問してまいりました。訪問先大学の選定理由は、次のとおりです。

一橋大学 朝日新聞（2003年1月5日）の報道によれば、かなり先進的に授業評価と評価結果の公開を行っているようであること。

国際基督教大学 授業評価への取り組みには伝統があり、熟慮されたアンケート制度を構築しているようであること。

結果的に、一橋大学は、マスコミの報道に誇張や誤りがありイメージしていたものとは異なりましたが、授業アンケートの内容において、また、組織的な取り組みに対する充実した考え方において学ぶところがありました。また、国際基督教大学は、そもそも10年以上も前に自然発生的に授業アンケートが開始されたという歴史に裏打ちされた、自由記述式に重点を置く合理的なアンケート制度とを持っているという点において学ぶところがありました。

一橋大学

一橋大学では大学教育研究開発センター長の山崎秀記先生（大学院商学研究科教授）、同センター専任講師（研究開発担当）北川文美先生、同センター専門職員佐々木クニ子さんにお話をうかがうことができました。

同大学では、2002年冬学期から正式に授業評価アンケート制度が導入されたようです。アンケート用紙にあたる授業評価票はマークシート方式で1枚、表裏に印刷されています。質問項目は19。「授業の目標・内容について」（2項目）、「講義要綱・オリエンテーション」（1項目）、「教員の教授行為について」（2項目）、「教員の熱意・態度について」（2項目）、「成績評価の方法について」（1項目）、「授業による学習の達成度」（2項目）、「学生の授業への参加状況」（2項目）、「授業に対する満足度」（1項目）、「各部所・分野・教員による独自の設問」（5項目まで設定可）、自由記述欄（1箇所）です。回答の選択肢は5つです。訪問した時点では、自由記述欄



一橋大学大学教育研究開発センターの山崎秀記センター長（左）と北川文美専任講師（右）。

でこそ学生からの率直で有用な意見が聞けるということで、末尾にあると蔑ろにされがちだから最初の部分に置くよう変更することを検討中だとおっしゃっていました。アンケートの結果は、学内の図書館、研究科の窓口で冊子として置かれていて、学生にも公開されています。ちなみに受講生が20人以下の講義などは、アンケートに応じた学生が特定できてしまうこと、アンケートによらずとも学生から直接声を聴くことができることなどから、対象とされていないそうです。

一橋大学で、さらに興味深かったのは大学教育研究開発センターという組織です。同センターは、2003年4月に大学の教育活動を不断に改善・向上するために、そのあり方を研究・開発するとともに、実際の教育活動とその改善努力を支援することを目的として新設されたものだそうです。大学の教育力向上のための教育システムや教授法の開発と教職員の研修支援、教育活動の点検評価を恒常的・効果的に行うための研究・開発と評価データの蓄積、全学共通教育（基礎教育や教養教育）のあり方の研究・開発と教育活動支援を役割とし、3つの研究部門（教育力向上部門・教育活動評価部門・全学共通教育部門）と2つの開発プロジェクト活動（教育力開発プロジェクト・全学共通教育開発プロジェクト）を通してほぼ5カ年計画で教育機能向上システムを構築することを目指しています。授業評価の結果を教員個人の責任にするのではなく、大学として改善を支援していこうという姿勢がうかがわれます。

国際基督教大学 (ICU)

ICUでは、ファカルティディベロップメント (FD) 主任鈴木寛先生 (教養学部理学科教授) と学事部主査篠田薫さんにお話をうかがうことができました。

ICUでは、かなり以前から先生方個人により自主的に授業アンケートが行われており、それが1988年に組織的に行われるようになり、1989年に一般教育科目で統一された形で開始され、それが1997年に基礎科目に範囲が広げられ、2000年春学期から学期ごとに全科目で正式に実施されるようになったそうです。名前は授業効果調査といい、“Teaching Effectiveness Survey”という英語名からTESと呼ばれています。2001年2月には教授会決議としてTESの公開が決まり、2001年度春学期分から印刷体のものをFDオフィスで公開し、2001年11月の教授会で学内サーバーでの公開が行われることが決まり、2002年からホームページ上での学内公開が実現しているようです。

ひとつ興味深いのは、教員がTESを実施しない場合、またはTESの実施後公開しない場合、その教員は理由などを記した文書を提出することになっている点です。これは“Comply or Explain” (従うか、または従わない場合、その理由を説明する。) という英米の考え方を反映していて、合理的であると思いました。

TESの目的は、個々の授業の (評価ではなく) 改善にあり、それに留まらず、授業に関するさまざまな問題点を総合的に調べることににより、カリキュラム全体の改善をはかり、ICUの教育全体の質の向上を目指すことにあるそうです。その意味で、TESは、“Course Valuation” (カリキュラム評価)、“Teaching Valuation” (教育評価)、“Learning Valuation” (学習評価) の3つの側面を持つとうかがいましたが、とても印象的でした。また、教育改善のために、FD主任は個別の教員の授業に関してアドバイザー的な役割も担っていらっしゃるようです。

ICUのアンケート用紙は2回の改訂を経て今日のものに至っており、最初は質問が詳細でしたが、学科、コースごとに応用のきかない汎用性の低いものや、施設の改善など学期ごとに変化するようなものでないものは除き、簡素化され、学生の負担も軽減されているようです。表面はマークシート、裏面は自由記述式です。「授業全体について」(5項目)、「教員について」(4項目)、「あなた自身について」(3項目)、「時間割について」(1項目)、そして教員があらかじめ設定されているいくつかの質問項目のなかから選択できるオプション欄 (事前に申し込んでおけば用紙にプリントアウトしてくれる) が10項目分あり、自由記述欄 (5項目) を含めると28項目までの質問となっています。回答の選択肢は概ね4つ、部分的に5つとなっています。

また、ICUでは、平日頃から講義で記述式のコメントシートによるアンケートを行っており、そのためTESは補助的なものであるとおっしゃっていました。とくに自由記述欄に特徴が認められます。学生は授業に期待すること、コースから触発されたこと、授業で改善すべきこと、コース・施設などについて感じたこと、その他質問・意見のあることに関して記述を求められます。一見すると自由記述欄が多すぎるように見えますが、ICUでは、学生は日頃のコメントシートへの記述で慣れているため、よく記入してくれるそうです。

学生が記入した事柄は学事部の方が手作業でまとめられ、一覧表にされるそうです。自由記述欄に関しては、とても手間をかけていらっしゃるようです。



国際基督教大学のファカルティディベロップメント主任の鈴木寛教授(左)と学事部主査の篠田薫氏(右)。

後 記

「教育評価」「授業評価」は、大学が「研究」ではなく、「教育」やその手段としての「授業」によって財政を成り立たせている以上、避けて通ることができないものです。学生はクライアント (お客様) で、私たちは「教育」というサービス (商品) を学生のみなさんに提供し、それに対して報酬を (しかも先払いで) 受け取っています。売り手としての私たち教職員が商品である「教育」の品質管理をするのは当然の義務であり、「教育評価」は品質が維持、向上されているかどうか測る作業に他なりません。「授業アンケート」は商品の品質に関するお客様満足度を測る重要な手段であって、「教育」という商品の品質を評価し、維持し、向上させるためには、欠くことのできないものなのです。

現在、中沖PJでの作業では、かなり合理的なアンケートが出来上がりがつつあります。しかしながら、自由記述式の質問に関してはあまり目が向けられていませんでした。この点、一橋大学もICUも重視しており、再検討の必要があることを認識しました。また、「評価」は「改善」を目的としたものであることを再認識しました。教育を不得手とする教員を排除するのではなく、よい教育ができるように改善を組織的に支援することが適切であることを認識しました。

なお、今回の訪問にあたりご協力いただいたみなさまに深く感謝いたします。

研修 参加記

大学教育開発センターには、他大学や他機関からFDに関するさまざまな研修の案内が届きます。大学教育開発センターNewsや掲示等でお知らせをしていますので、興味、関心のある研修にはぜひご参加ください。

ここでは、昨年7月～12月までに各研修会に参加いただきました先生方の報告を紹介します。

平成16年度 大学の教育・授業を考えるワークショップ

日 時：2004年7月28日(水)～30日(金)
主 催：(財)私学研修福祉会
場 所：グランドホテル浜松
参加者：理工学部教授 林 久夫

昨年の夏、久しぶりに私大連のワークショップに参加しました。研修会のタイトルは「大学の教育・授業を考えるワークショップ」、期間は7月28日から30日の3日間、会場はいつもの「グランドホテル浜松」でした。私が参加したのはグループ討論のコースで、テーマは「授業評価のあり方と活用法」です。

まず、国際基督教大学の絹川正吉先生より、「評価の時代における私大教員の在り方」と題する基調講演がありました。授業評価に関しては、例えば「納豆はまずい」は、納豆に対する評価か、それとも意見の申告か？ といった分かりやすい例を引きながら、授業評価に対する基本的な考え方を示され、教育評価と教員査定とを明確に区別し、「意見・申告」でない授業評価が必要であると結論付けられました。絹川先生は、また、「特色GP」実施委員会の委員長でもあるので、遠山プラン発足の経緯やGPの本質などについての話も聞くことができました。

グループ討論では、「授業評価の功罪」とか「授業評価の位置付け」といった、一般論・本質論の議論が多かったのは少し残念でした。私は、JABEE認定の経験をもとに、龍谷大学の現状や問題点について紹介し、学生アンケート形式の授業評価の実施は当然のこととして、その上で活用法やそれ以外の有効な授業評価法に関して、情報を収集しようと努力したのですが、目的は充分には果たせませんでした。唯一つ印象に残ったのは、京産大の「教育エクセレンス支援センター」副所長の藤井健先生が、「本学では初めて全学一斉の授業参観を実施した」と胸を張って報告されたことでした。教授会の議決を経ずしてこれができるというのはですから驚きです。

最後に一言。このようなFDの機会は色々あり、各個人が個別に参加しているのが実情でしょうが、それでは情報収集として完全性が望めません。また、特定の個人に集中するのも公平性の面で望ましくありません。今後FDセンターが率先して、新しい情報収集システムを構築されることを心から期待します。

平成16年度 情報倫理教育研究集会

日 時：2004年9月6日(月)
主 催：(社)私立大学情報教育協会
場 所：立教大学池袋キャンパス
参加者：社会学部助教授 小黒 純

当日は全国から約70人が参加。前半の約2時間は、同協会が2年の歳月をかけて開発したという情報倫理教育eラーニング教材(ソフト)の紹介。休憩を挟んで後半は約1時間半、開発者と参加者との間で活発な意見交換が行われました。

教材は、①インターネット社会の特質などを説明する「総論」、②パスワードの重要性などを強調する「被害防止」、③著作権侵害の対象や範囲を解説する「加害防止」、④「インターネット社会におけるセキュリティ」、⑤「インターネット社会における知的財産権の保護」、という5つの柱からなっています。

音声と画像でつくられており、コンテンツは同協会から各大学のサーバーに配信される形を取っています。利用者の意見を踏まえ、内容は随時、更新されます。

本教材についての私個人の評価は決して高くありません。その理由は、内容に目新しさがほとんどないということに尽きます。例えば「インターネット社会の便利さを謳歌しているだけだと、思わぬ落とし穴に落ちる恐れがあります」「個人のプライバシーに関わる情報を収集して悪用し、侵害しようとする人たちもいます」……。これらは、インターネット利用者にとっては基本的な知識でしょうし、わざわざ音声と画像を使って説明しなければならない内容なのか疑問です。

もう1つの問題は、5つの柱ごとに作成者が違うため、内容が重複したり、紹介の手法にばらつきがあったりと、整理が不十分であることです。この点は、質疑応答の時間にも会場から指摘がありました。開発者側は「あくまで教育の素材と考えてほしい」と回答していましたが、「寄せ集め」「素人っぽい作り」という感はありません。

なお、参加費と資料代についてもコメントしておきます。大学の施設を利用しての開催にもかかわらず、参加費1人7,350円(税込)というのはいかにも高額ではないでしょうか。A4判44ページの冊子が参加者に配布されましたが、報告用にともう1冊求めると「一部300円」と言われました。この研究会開催の趣旨は「広く教材が利活用されるよう、内容および使い易さなどについて機能を高め」ることにあつたはずで、主催者側の対応には首を傾げざるを得ません。

平成16年度 大学情報化全国大会

日 時：2004年9月7日(月)～9日(木)
主 催：(社)私立大学情報教育協会
場 所：アルカディア市ヶ谷
参加者：経済学部教授 井口 富夫

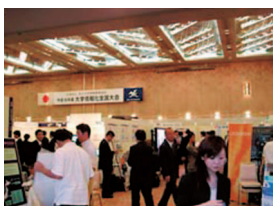
開催された3日間のうち、7日と8日に参加しました。7日は、全体会議で午前・午後あわせて合計6件の報告と、報告者を含めたパネルディスカッションが行われました。8日は、分科会と情報機器やソフトに関する展示会が開催されました。分科会は、午前10時から午後6時30分まで、6会場に分かれて合計75件の報告がありました。報告の内容は、全国の各大学が実施している情報化の取組みに関する事例紹介です。最近2、3年の間に、ノート型パソコンを全学生に携帯させ、情報教育を開始した、といった報告が多数ありました。

参加しての素直な感想は、2つあります。

- ① 情報化に関して龍谷大学の現状は、先端的な大学に比べて、非常に遅れている
- ② 経済学部が、夜間主コース開設時に合わせて実施したノート型パソコンによる経済学教育は、極めて先進的な試みであったと再評価すべきである

特に印象に残ったのは、千歳科学技術大学が推薦入学試験で早い時期に合格した高校生を対象に、高大連携でe-Learningによる事前学習を実施している報告です。

今回、龍谷大学から参加したのは、東澤さん（メディア教育課長）、西坂さん（システム課）と井口（筆者）の3人だけです。当たり前のことですが、大学は研究・教育サービス機関であるため、情報化といっても研究・教育に活かされてこそ、巨額の投資が有益に活用されたことになるはずです。教育職員・事務職員を含めて、教学や教務関係の部署から関心を持って参加する人がいないのは実に残念なことです。毎年何億円も投じて情報設備は新しくなっても、龍谷大学の情報化が進展しないのは当然だと感じています。



詳細は、http://ww1.tiki.ne.jp/~tanabe_yo/tanabe/FujiFilm/DaigakuJohoka/DaigakuJohoka2004.htmlをご覧ください（写真左も）
右側の写真は、展示企業のWebサイトに載っている展示風景です。
（<http://www.transware.co.jp/info/expo/juce2004/>より）

IT教育支援協議会第3回フォーラム 高等教育におけるeラーニングの新展開

日 時：2004年12月7日(火)
主 催：IT教育支援協議会
場 所：メディア教育開発センター
参加者：理工学部助教授 藤田 和弘

IT教育支援協議会は、工科系大学教育連携協議会、産学バーチャルユニバーシティコンソーシアム、獣医学系教育ITコンソーシアム、4大学連合複合領域コースIT化コンソーシアム、国立大学情報処理教育センター協議会、国立七大学外国語CU委員会、国立大学教育実践研究関連センター協議会、国際ネットワーク大学コンソーシアム、高専IT教育コンソーシアム、SCS事業連絡協議会、バイオデジタル大学コンソーシアムの合計11コンソーシアムが参加する協議会で、フォーラムや研究会を開催しています。

第3回フォーラムは、「高等教育におけるeラーニングの新展開」というテーマで開催されました。

基調講演は、「文部科学省におけるe-Learningの推進について」で、「循環型e-Learningシステム」の構築を提唱し、文部科学省・大学等高等教育機関・メディア教育開発センターが協力して、e-コンテンツの開発支援、利用者へのワンストップサービス、利用者ニーズの把握という点を推進していくことが述べられました。

二つ目の基調講演は、「効果的な遠隔教育/e-Learning実施の視点」で、策定中の「高等教育におけるeラーニングのガイドライン」の中間的な報告でした。今後、諸外国のガイドラインなどを参考に、まとめるとのことでした。

パネルディスカッションでは、早稲田大学、玉川大学、長岡技術科学大学、熊本大学から実践事例等の紹介がありました。

今回のフォーラムに参加して、全体としての印象は、e-Learningが試験研究的な段階から実用実践的な段階に移行しているということです。各大学でのLMS/CMSの導入から、e-Learning教材へのLOM付与および流通へと発展していく方向性が出てきたと感じました。

Faculty Development 活動紹介

教育改善のために様々な取り組みが行われています。

キャリア支援に向けて

経営学部教授 佐藤 研 司

学生にとってどの大学に入るかもさることながら、卒業後の進路をどのように確保するのか、特に、昨今の経済環境は、学生の職業選択に大きな影を落としています。卒業時の就職率が70%台とか、特定の職業を持たないフリーターや、さらには、就業そのものを拒絶するニートなる現象までもが出現しています。こうした流れを受けて、学生に対しての就職支援のあり方も、単なる求人企業の紹介だけに止まらず、職業観の涵養、社会人として求められる資質の向上、基礎的なスキルの習得など、いわゆる、学生のキャリア形成に積極的に関わっていくことが求められています。本学においても、それまでの就職部がキャリア開発部に衣替えをおこない、各学部キャリア開発主任を置くなど、制度的な改革を進めてきました。この制度改革における大きな柱は、就職活動時期だけに支援を行うのではなく、新入生から既卒生までを対象とし、彼らのキャリア形成を側面から支援する総合的な仕組みを大学が用意することにあります。特に、大学の中心である教学との関連の中で、キャリア形成をどのように推進していくのが課題となっています。

教員の果たすべきキャリア支援

教学における主導的立場にある教員も、こと就職とかキャリア形成となると勝手が違いすぎて、敬遠しがちというのが実情です。特に、自身での就職経験のない先生にとって、実感を含めて「就職」は縁遠い話に写っているようで、さらに、キャリア形成となると、概念的な必要性は認識されても、何をどうすればよいのかと不安を持たれる先生も多いようです。しかし、学生の側から見ると、日常的に最も接点が多く、何かと相談を持ちかけやすい存在が教員です。キャリア支援に向けてのFD活動として、まず現状の就職状況を理解して頂くこと、学生がどのような状況の中で、どのように活動し、何に困っているのかを、指導する立場にある教員自身が理解することを手始めに、キャリア支援に向けてのプログラムをスタートさせました。採用の実態や内定状況等、通常の統計データには現れない就職活動の実態を垣間見ることができました。また、企業の採用担当者（人事担当者）にお越しを頂き懇談会を開催し、企業がどのような人材を求めているのか、何を見て採用・不採用を決めているのか、選考側の論理を聞くことも有益な情報でした。もちろん、話を聞いたからすぐに指導に役立つというものではありませんが、少なくとも現状を知るといことは大変に有意義なことであったと思います。また、こうした懇談の中で、エントリーシートや履歴書の書き方、企業にお

ける面接試験への対応といった、現実的な疑問や質問も数多く出されました。確かに、学生と話をしていると、「エントリーシートはこれで良いのでしょうか」とか「履歴書の自己アピールはどんなことを書くの」という質問はよく出る話です。こう書けば良いという答えがないだけに、この対策は難しいですが、将来的には何らかの対応策を検討しなければならないのではないのでしょうか。

学生に就職の準備をさせる

企業の採用活動が年々早くなっています。3回生の10月に企業説明会などという信じられないような話もあります。それでも、年が明ければ、いやでも現実問題として就職活動が始まってしまいます。3回生の後期に入った段階で、そろそろ自分の将来進路について現実的に考えさせることは重要です。企業に対しての情報も少なく、アルバイトくらいしか社会との接点を持っていない学生にとって、何を手がかりに自分の将来を考えればよいのか、彼らの悩みは大きいものです。キャリア開発部の準備してくれる自己分析や職業観分析のプログラムも大変に有効な手段です。特に、ゼミ単位での受講に配慮してもらえるのは指導する教員からみてもありがたいことです。活動が本格化する前の準備として、就職活動を動機付けさせるための試みを実施してみました。経営学部同窓会の支援を得て、就職直前講座と銘打って、フリーアナウンサーの堀井さんを講師に、ビジネス・コミュニケーション、仕事におけるコミュニケーションのとり方という講演会を開催、面接時の対応を含めてコミュニケーション・スキルを教えて頂きました。社会人としての当然知っておくべきマナーを含め、改めて新鮮なものを感じた。また、リクルートの方にも、就職に関する情報の集め方やその活用の仕方についてお話頂く機会を提供することができました。こうしたものを機会として、学生が自分の就職について考え始めるきっかけを与えることができれば幸いと思っています。

これからのキャリア支援のあり方

キャリア形成は就職活動の下準備です。3回生、4回生になって突然考えるのではもはや手遅れ、もっと早い段階から考えるべきテーマです。キャリア開発に向けての制度改革でも、1、2回生を含めてキャリア形成を教学と関連させて進めていくことの重要性が指摘されています。言葉では「職業観」とか「自己分析」というキーワードは出てきますが、これらをどのように教学の中に組み込んでいくのか、どのような教学の機会に何をどう提供するのか、解決すべき課題は山積みです。これからも一つ一つ確認しながら前に進んでいくしか他に方法はなさそうです。

基礎演習のクラス間での多様性

国際文化学部助教授 鈴木 滋

国際文化学部では、1回生前期の学部基礎科目として1回生全員に基礎演習を必修としています。基礎演習では、各学生個人と教員とのつながりをつくるために、1クラス20人前後の20数クラスにわけ、学部教員の20名程度が各学年1クラスを担当します。基礎演習の目的は、大学で必要な学習方法の基礎を身につけることとされ、基本方針は共通していますが、具体的な内容は各教員にゆだねられています。国際文化学部は各教員の専門分野が多様であるために、基礎演習の担当教員間での共通性を確保することは、基礎演習導入以来の課題となっています。

そこで今年度、各教員によってどれくらい基礎演習の内容が異なっているのかを、教員へのアンケートなどを通して調べてみました。基礎演習の担当経験者は、語学担当教員以外の26名ですが、そのうち16名から回答を得ました。

構成と内容の多様性

アンケートの結果、基本的なレポート作成を目的とした知的生産技術について各授業の内容が設定されており、大枠は共通していることが確認されました。回答のあった16クラスのうち、13クラスではレポートを学生の興味にもとづいてつくらせており最終提出課題については一見共通性が高いようです。セメスターの前半は、講義と学生の作業の回、後半は、発表と討論やコメントの回というコースの構成がほとんどです。

とはいえ、各クラスによる違いははっきりとみられました(表1)。2クラスは、あらかじめ決められたテーマからレポートをグループで作成していました。また、5クラスはグループで1つのレポートを作成しており、レポートの発表も、学生個人で行う場合と、グループで行う場合があるほか、発表時間や発表の授業回数にもばらつきがあり、中間発表とまとめの発表と各学生が2巡するクラスもありました。

その他、レポート字数については、1600字から最大1万字的のクラスもあり、ばらつきが大きくなっています。また、成績評価でのレポートの配分についても、全クラスの平均は44%ですが、クラスによって20%から60%まで開きがあります。また、学生相互のコメントを評価に加味しているクラスもあります。

【表1】 演習内容の各項目

レポートの構成	★★★★★★★★
読書メモ・ノートの取り方	★★★★★★★★
自己紹介	★★★★★★★★
テーマの探し方・計画発表	★★★★★★
カード資料の作成・整理方法	★★★★★★
指定文献の章の要約と発表	★★★★★★
新聞スクラップや記事の紹介要約	★★★★★★
文献検索と引用の仕方	★★★★★★
パワーポイントによるプレゼン方法	★★★★★★
アンケート調査方法	★★★★
ビデオを視聴し要約を提出	★★★★
文章の書き方	★★★
インターネット利用上の注意	★★★
KJ法とその練習	★★★
インタビュー方法	★★
学生によるクラス名簿づくり	★
ディベートの方法と練習	★

星数はクラス数：ただし回収したレジュメ記載分のみから数えた。

総合での評点については、厳しいクラスと甘いクラスがそれぞれ数クラスずつある形になっています。2004年度前期の評価では、学生443名(うち再履修9名)の合格率は99%、平均点は83点で、全般にかなり高い評価です。クラス間の平均点の差は、最大91点と最小78点で10点以上の開きがありました。

学生からの評価

以上の教員側の方針に対して、学生はどのように受けとめているか、私の担当する講義科目の学生132名にアンケートをとってみました。まず各個別の意見としては、先生によって内容に違いがありすぎるという意見がもっとも多くあげられました(6名)。また、教員からの一方的な指導や講義内容に対して、また、自分の興味でテーマを選べないとの不満もありました(4名)。各質問項目の集計では、難易度については、おおむね妥当であるとの評価をしていますが、全体の2割をこえる学生が教育的な効果について否定的な評価をしています。各演習内容の項目でも学生の評価にはばらつきがみられました(図)。レポートの書き方一般については、当然のことながら評価が高いのですが、発表や司会、討論やコメントの仕方については評価が低いことがわかりました。

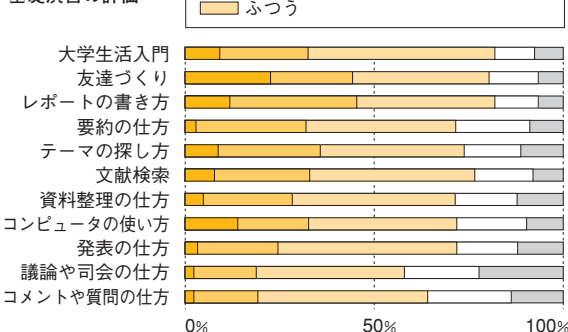
共通化と多様性をめぐるジレンマ

国際文化学部は、多彩な講師陣をもとにしたカリキュラムの多様性が特徴であり、各ゼミでの演習はもちろんですが、基礎演習の内容に各教員によって多様性が生じるのも、ある程度はやむをえないのかもしれませんが。多様性を受入れることは、異文化相互理解を目標とする国際文化学部の理念と一致することでもあり、単にカリキュラムを教員間で統一することが望ましいとは思えません。しかし、現状の基礎演習はばらつきが大きすぎて、学生に不公平感をもたらし改善の余地があるのも事実です。専門分野を生かした多様性を損なわずに、共通性を確保するためには、まず教員間で基礎演習カリキュラムの情報を共有することが重要だと考えます。そのためには、こうした現状の調査と報告にくわえ、シラバスの公開や共通講義を教員が相互に聴講することなどをおして、教員が意見を交換し、最低限の共通枠を設定することが現実的だと思います。調査の詳しい内容は以下のHPをご参照ください。

<http://www.world.ryukoku.ac.jp/~suzuki/kisoen-houkoku.html>

【図】

学生による
基礎演習の評価



新着図書

大学教育開発センターでは、センターの資料として図書を購入しています。貸し出しも行っていますので、どうぞご利用ください。また、購入図書の希望も募っていますので、ご希望があればお知らせください。

書籍名…大学授業の生態誌「要領よく」生きようとする学生
著者名…島田 博司
出版社名…玉川大学出版部

書籍名…メール私語の登場 -大学授業の生態誌3-
著者名…島田 博司
出版社名…玉川大学出版部

書籍名…大学授業のフィールドワーク 京都大学公開実験授業
編・訳者名…京都大学高等教育教授システム開発センター
出版社名…玉川大学出版部

書籍名…知へのステップ
-大学生からのスタディ・スキルズ-
編・訳者名…学習技術研究会
出版社名…くろしお出版

書籍名…私学高等教育の潮流
著者名…P.G.アルトバック
編・訳者名…森 利枝
出版社名…玉川大学出版部



書籍名…アメリカの大学教育の現状
-日本の大学教育はどうあるべきか-
著者名…橘 由加
出版社名…三修社

書籍名…アジア・オセアニアの高等教育
著者名…馬越 徹
出版社名…玉川大学出版部

おすすめの 一冊

『恐るべきお子さま大学生たち 崩壊するアメリカの大学』

ピーター・サックス
後藤将之訳
草思社 2000年
1,680円(税込)



この本は30代半ばで新聞記者から「あこがれの」大学教師に転職した著者による「赤裸々レポート」である。彼は、ふんぞり返って軽蔑と退屈の表情を浮かべながら「何か俺に面白いことをいってみな」という態度をとり、授業中に携帯電話をかける若者に教室で直面する。しかもそのような学生たちが「授業評価」という形で教師の生殺と奪権を握っている大学の現実を知り、転職を激しく後悔する。それでも、彼は、初めの学期は、自分が大学はかくあるべきと考える水準の授業を行い、厳しく成績を付けるが、それに対する学生の反発と低い授業評価によって解雇の危機に見舞われる。そこで、彼は次の学期から授業の課題を易しいものにし、成績を甘くし、さらに若者受けする話し方を身につけるために演技指導学校にまで通う。このような方針転換と涙ぐましい努力の結果、授業評価は劇的に改善し、彼はテニユアを得ることに成功する。

授業をエンタテインメント並に面白くし、優を乱発するアプローチによれば、学生＝消費者は喜び、それは入学者の増加につながるため大学経営者も満足し、教師もテニユアや昇給というご褒美をもらえる。つまり、みんながハッピーになれる。もっとも、大学の学術水準と少数の真面目に勉強したい学生が犠牲になることに目をつぶれば、であるが…なお、最後の章では、このような大学の現状を改革するためのいくつかの方策(例えば厳格な成績評価の導入や成績分布の公開等)も提案されている。

学生の満足もたしかに大切なのだが、それだけ果てしなく追求していくと大学はどうなるか、ということを考えさせられる一冊である。(法学部助教授 平野 哲郎)

※この書籍以外にも大学教育開発センターで貸し出しを行っています。どうぞご利用ください。

2004年度活動報告 8月1日以降

- ◆指定プロジェクト「教育評価」
公開研究会(9月13日・10月11日・11月11日・12月9日・1月13日)
学生による授業評価に関する調査(10月22日):一橋大学・国際基督教大学 訪問講演会(11月18日) ※表紙参照
①講師:坪井和男氏(中部大学大学教育研究センター長)
テーマ:「教育活動・改善表彰制度より良い教育を目指して」
②講師:大塚雄作氏(京都大学高等教育研究開発推進センター教授)
テーマ:「授業の改善とアカウンタビリティ授業評価をどう捉えるか」

- ◆FDサロン
第5回:9月30日(木)
話題提供者:伊藤敏和(経済学部教授)
話題:「個性ある学生を育てるには(数学の教育を通してみた)」
第6回:10月15日(金)
話題提供者:ファーマノフスキー マイケル(国際文化学部助教授)
話題:「コンピュータを使用した新しい学習法」
第7回:10月28日(木)
話題提供者:藤原直仁(短期大学部助教授)
話題:「社会福祉施設実習から福祉体験活動へ」
第8回:11月16日(火)
話題提供者:湯川宗紀(本学非常勤講師)
話題:「必要な道具をうまく使いこなすために」
第9回:11月26日(金)
話題提供者:中川孝博(法学部助教授)
話題:「マスプロ講義における教員と学生のコミュニケーション～刑事法入門の実践例」
第10回:12月10日(金)
話題提供者:宮浦富保(理工学部教授)・横田岳人(理工学部講師)
話題:「環境ソリューション工学科のカリキュラム～野外における実習の進め方～」
第11回:12月16日(木)
話題提供者:北村 高(文学部史学科教授)
話題:「アナログ文学部FD一直線」

◆大学教育開発センター通信 第7号発行(7月30日)

◆大学教育開発センター News 発行

2004-12(9月10日)	2004-13(9月22日)
2004-14(10月4日)	2004-15(10月19日)
2004-16(10月21日)	2004-17(10月25日)
2004-18(10月28日)	2004-19(11月4日)
2004-20(11月5日)	2004-21(11月9日)
2004-22(11月15日)	2004-23(11月22日)
2004-24(12月8日)	2004-25(12月17日)
2004-26(1月6日)	2004-27(1月11日)
2004-28(1月14日)	2004-29(1月21日)

◇機能推進プロジェクト開催状況

■教育活動評価支援プロジェクト

2003年度「学習に対する意識・実態アンケート」、2003・2004年度「学生による授業評価調査(授業アンケート)」の報告書作成について(10月8日)
指定プロジェクト「教育評価」と合同で開催(11月11日・12月9日・1月13日)

■交流研修プロジェクト

大学教育開発センターから案内し、参加者のあった研修会等

- ・平成16年度情報倫理教育研究会
(社団法人私立大学情報教育協会)9/6……1名
- ・平成16年度大学情報化全国大会
(社団法人私立大学情報教育協会)9/7・8……1名
- ・IT教育支援協議会第3回フォーラム
(メディア教育開発センター)12/7……1名
- ・シンポジウム「京滋私大の教養教育はいま」
(立命館大学教養教育センター)1/22……2名
- ・平成16年度国際シンポジウム「大学と社会」
(大阪大学大学教育実践センター)1/24・25……3名
- ・公開講演「教育におけるメディア活用と著作権について」
(メディア教育開発センター)1/28……1名

2005年度 大学教育開発センター事業計画

教育活動支援機能

■学生による授業評価調査(授業アンケート)の実施

2003年度、2004年度は各年度1回の実施でしたが、2005年度からは、第1学期(前期)、第2学期(後期)ともに実施する予定です。学生からの意見を聴く貴重な機会を有効活用してください。

■カリキュラムアンケートの実施

2004年度は京都学舎(文・経済・経営・法・短期大学部)の卒業年次生を対象に実施します。2005年度は、瀬田学舎(理工・社会・国際文化学部)の卒業年次生を対象に、龍谷大学で学んだ4年間のカリキュラムについてのアンケートを実施します。

■マークカードを用いた自動採点・成績管理ソフト「SSくんⅡ」の利用促進

授業中の小テストやアンケートの回答にマークカードを用いると、マークリーダー・自動採点ソフトの利用により、採点や集計に係る時間が短縮されます。2005年度には「SSくん」が「SSくんⅡ」にバージョンアップします。これまでよりも機能も充実する「SSくんⅡ」をできるだけ多くの先生方に有効活用していただけるよう推進に努めます。

教育研究・開発機能

■自己応募プロジェクト事業

教育改革を推進する一環として、学内の個人またはグループに対し、授業・教材等の研究開発を奨励し、経費面での支援を行います。研究開発成果は報告書の作成及び研究発表会により報告されます。

■指定プロジェクト事業

大学にとって必要な教育開発研究を行い、より教育効果の高い教育を実践するための基盤づくりを進めることを目的として、大学教育開発センターが指定する教育開発に関するテーマについて研究開発を行うプロジェクトです。

2005年度は次のテーマについての教育開発を進めていきます。

- 「教育評価」(2004年度からの継続)代表:中沖隆彦(理工学部)
- 「成績評価」(2004年度からの継続)代表:小島 勝(文学部)

※他に「導入教育」を含め新たなテーマを検討中

FD活動啓発機能

■新任教員対象研修会の実施

龍谷大学に初めて着任された先生方を対象に、龍谷大学の教育理念をはじめ、本学での教育研究活動に必要な事項についての研修会を行います。

■教員対象パソコン講習会の実施

パソコンを使うのは苦手という先生方からスキルアップをしたい先生方まで、ワープロ・表計算ソフトの基礎から専門分野で利用するソフトの使い方まで、いくつかの講座を開講します。毎年度、原則9月と2月に開講を予定しているので、年々スキルアップが可能です。

■FDサロンの開催

月1回を目安に、教職員間の交流の場として開催しています。毎回異なるテーマを設定し、お茶でも飲みながら話題提供者の話について自由に意見交換しています。

そのときに参加できなかった方やより多くの方に内容を知っていただくために「FDサロンレポート」を発行します。

■FDに関する講演会・セミナーの開催、学生との交流

FD活動をひとりで行うことはなかなか難しいです。学生との交流や、講師を招いて開催する講演会に参加することでFD活動の幅を広げていただきたいと思います。

■公開授業と講評会

自分の授業は学生にどのように見えているのだろうか、他の先生の授業を参観しながら自分の授業と照らし合わせることができます。また講評会では、公開された授業に対して、また参観した先生方が担当されている授業に対する意見交換を行います。

■大学教育開発センター通信・大学教育開発センターNewsの発行

大学教育開発センターでの取り組み、FD(Faculty Development)に関すること、学外での研修会やフォーラムの案内など、大学教育開発センターの活動記録として、センター通信は年3回、センターNewsは月1回を目安に随時、発行します。

■大学教育開発センターWebの充実

学内外に、大学教育開発センターの活動を知っていただくために、Webのさらなる充実を図ります。

《教員対象》パソコン講習会開催

大学教育開発センターNews (No.2004-27) にてお知らせいたしましたとおり、今年度も教員のパソコンスキルの向上を目的とした「パソコン講習会」を深草学舎で開催いたします。参加費は無料です。まだお申し込みでない方はぜひご参加ください。

- 講習期間／2005年2月14日(月)～2月23日(水)
 - 場 所／深草学舎 5号館 情報処理実習室（教室は当日5号館入口に掲示いたします）
 - 講習担当者／メディア教育課スタッフ等
 - 定 員／各コース1クラス開講 定員30名（申込先着順）
 - 申込締切／2005年2月4日（金）
 - 申込方法／①希望するコース ②氏名 ③所属学部（非常勤はその旨）
④連絡先（電話・E-mailアドレス等）を電話もしくはE-mailにてお申し込みください。
 - 申 込 先／大学教育開発センター（内線1050、1051／DCHE@ruc.fks.ryukoku.ac.jp）
- ※なお、すでに定員に達している場合はお申し込みができませんのでご了承ください。

日 程 (2 講時／10:45～12:15) (3 講時／13:15～14:45)	内 容	講 習 内 容
2月14日(月) 2・3 講時	Mathematica (基礎編) 講習	数式処理ソフトウェアMathematicaの基本的なコマンドなどの把握。 基礎的な入力、グラフの描画、方程式を解く、線型計算を行う、微分や積分を行う、微分方程式を解く、といった基本的な内容を説明する。
2月15日(火) 2・3 講時	Mathematica (応用編) 講習	数式処理ソフトウェアMathematicaを、教育教材や研究道具として活用する方法の把握。 ・外部ファイルとのデータのやり取り（Microsoft Excelとの連携を含む） ・Mathematicaによる数値計算の危険性（誤差の問題やコンピュータの性能による制限について） ・Mathematicaプログラミングの初歩
2月16日(水) 2・3 講時	基本操作講習	コンピュータの基本操作。 ・Wordを用いた基本操作…文書作成のための一連操作（入力、編集、印刷、保存等） ・Windows基本操作…ドライブへの保存やファイルの削除とコピー、ファイル名の変更、フォルダ作成 ・Webページの閲覧や情報検索…WWWを使った情報検索と知っていると便利な情報検索のコツを紹介
2月17日(木) 2・3 講時	デジタルカメラ 活用講習	デジタルカメラの利用と画像編集したものの活用。 ・デジタルカメラで撮影…貸し出しカメラや持ち込みカメラで撮影 ・画像修正…コンピュータに取り込んだ画像のサイズや明暗修正など ・デジタルカメラを教室のビデオやテレビに接続 ・活用方法の紹介…アプリケーションソフトを使った画像表示やWord、Powerpoint スライドへの画像取り込みやサイズ調整 デジタルカメラもしくはカメラ付き携帯電話をお持ちの場合、ご持参ください。ご自分のカメラで操作していただきます。
2月18日(金) 2・3 講時	MS Excel 講習	提示資料のためのデータの加工。 ・基本操作…データ入力、書式設定、表作成、計算、関数、グラフ、印刷、集計など ・他のアプリケーションソフトへのグラフ貼り込み
2月21日(月) 2・3 講時	MS Word (応用編) 講習	統一されたスタイルの原稿作りとWord画面を見せる工夫。 ・スタイルを用いた文書作成…スタイル設定、スタイル作成、ページ設定、目次、画像の挿入、印刷 ・スライドとして利用する場合…テキストボックスやオートシェイプの利用、ハイパーリンクの設定、画面表示の調整、蛍光ペンの利用など
2月22日(火) 2・3 講時	Power Point 講習	プロジェクターやスクリーンに投影するための効果的なスライドを作成。 ・基本操作…スライド作成、アニメーション設定、デザインの適用 スライドを効果的に見せるためのアニメーションの設定、URLのリンク設定、サンプル動画の貼り込みなど ・提示画面への切り替え…スライドショーの実行 ・印刷…配付資料用としての印刷方法
2月23日(水) 2・3 講時	Webページ 作成講習	Webページでプロジェクターやスクリーンに投影するためのスライドを作成。 ・ソフトウェアを使った提示教材用Webページ作成…簡易Webページ作成、画像挿入、リンク設定など



先生の知恵袋

センターの職員として、先生方と関わる中で、この話は他の先生方にも役立つのではないだろうかと思うことがたくさんあります。センターに立ち寄られた先生の一言、FDサロン終了後の雑談の中、こういった中から拾いあげた先生方の持たれているひと工夫、みなさんにも紹介できれば・・・このような思いから、このコーナーは生まれました。

コミュニケーション・ツールとしての授業評価

大学における授業の多くは、教員から学生への一方的な授業になりがちです。また、授業中や授業後に教員に質問をする学生はほとんどいません。しかし、質問をしたいと考えている学生、また、先生と話したいと考えている学生がいるのではないのでしょうか？ また、学生が教員や授業に対し意見を言う機会、質問をする機会をつくるにはどうしたらよいのでしょうか？

ある先生は、学生とのコミュニケーション・ツールとして授業評価を取り入れておられます。大学で一斉に行う「学生による授業評価調査（授業アンケート）」とは別に、毎回の授業の終わりに個人的に実施されています。学生に「教員や授業に対する質問や疑問、意見」などを自由に書かせるのです。そして、「学生の理解度」、「学生の生の声」を把握し、次の授業にそれらをフィードバックする、という方法で「授業の改善」へつなげておられます。

●その他、他大学で実施されている例を下記に載せました。興味のある方は一度ご覧ください。

「大 福 帳」（織田輝準／三重大学）<http://cerp.edu.mie-u.ac.jp/D/|inetpub/wwwroot/scs/odadf.html>

「何でも帳」（田中毎実／京都大学）<http://uma.higheedu.kyoto-u.ac.jp/jugyo/jugyo005-tanaka.htm>

第10回 FDフォーラム開催

テーマ「評価される大学教育」

開催日時・場所 2005年3月5日(土) 同志社大学今出川校地寒梅館
2005年3月6日(日) キャンパスプラザ京都

●スケジュール

▼1日目/基調講演・シンポジウム

2005年3月5日(土)

●会場/同志社大学今出川校地寒梅館

- 12:00~13:00 受付
- 13:00~13:10 開会挨拶
- 13:10~14:10 基調講演
- 14:30~17:00 シンポジウム
- 17:00~17:25 大学コンソーシアム京都事業説明
- 17:30~19:30 情報交換会

基調講演『21世紀国際社会と日本の大学の使命』

講師：猪口 邦子氏
(上智大学法学部教授・前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使)

シンポジウム『誰のための評価?』

パネリスト：清水 建宇氏 (朝日「大学ランキング」編集長・朝日新聞論説委員)
山田 礼子氏 (同志社大学教育開発センター副所長・文学部教授)
木野 茂氏 (大阪市立大学大学教育センター助教授)
コーディネーター：松下 佳代氏 (京都大学高等教育研究開発推進センター教授)

▼2日目/分科会

2005年3月6日(土)

●会場/キャンパスプラザ京都

- 9:00~9:30 受付
- 9:30~11:40 午前の部
- 13:30~14:30 午後の部
- 14:40~15:00 大学コンソーシアム京都事業説明
- 15:00~16:00 10周年記念懇話会
「FDフォーラム10年間のあゆみ」

分科会テーマ

- 第1分科会：授業評価のあり方
- 第2分科会：意欲の喚起と動機付け
- 第3分科会：FD活動の組織的取り組み
- 第4分科会：高大の接点としての大学入試
- 第5分科会：多様なパートナーとの連携とFD活動
- 第6分科会：特色のある大学教育プログラムと学生支援
- 第7分科会：授業改善 ー新しい時代における授業のあり方を探る
- 第8分科会：大学生の変化と大学教員の課題 ー新たな「教育の評価」

●第1分科会 授業評価のあり方

大学における「授業評価アンケート」などによる授業評価について、「大学教育の説明責任としての授業評価」、「授業者による自己の振り返りのための授業評価」の両者の報告を中心に、さらに「複数大学の事例を分析した立場からのコメント」を交えて議論を展開していきたい。

●第2分科会 意欲の喚起と動機付け

次の3点から大学における導入教育の方向性について検討したい。
①スポーツ活動における動機付けの実践
②スポーツ活動をサイエンスとして捉える指導
③難しいサイエンスを易しい言葉で理解させる

●第3分科会 FD活動の組織的取り組み

大学の教育の質を高めるには、FD活動を行い、地道で不断の努力を重ねることが重要であるが、それをどのように活性化させるのか。個人の活動をどのように組織的にしていくのか。FD活動の制度化が重要なのか。「個人」、「センター」、「組織」という視点からFDを再検討する機会としたい。

●第4分科会 高大の接点としての大学入試

大学全入時代をいわれる2007年、新課程カリキュラムによって教育を受けた新入生を迎える2006年を目前にして、高大連携および高大接続という視点から、改めて高大の接点としての大学入試の位置づけ、ないしは意味づけを考えてみたい。

●第5分科会 多様なパートナーとの連携とFD活動

地域社会との連携、地域産業との連携、そして男女共同参画社会における女性の教育という三分野に焦点を当て、大学に課された役割について報告する。

●第6分科会 特色のある大学教育プログラムと学生支援

GP(特色ある大学教育支援プログラム)の第4テーマ「主として学生の学習及び課外活動への工夫改善」の中から3つの取り組み事例を報告し、大学における学生の知的探求を促進する実践にFDがどのようにかわるかを議論することを目的としたい。

●第7分科会 授業改善ー新しい時代における授業のあり方を探る

学習者の環境は既に文字メディア中心の社会環境ではないという認識の上から学習をどう組み替えるか、また「教え方(teaching)」の見直しだけでなく学生自身の「学び(learning)」をどう支援するか、さらには授業支援ツールの活用による教員自身の授業デザイン力をどう形成するかなどによって新しい時代における授業のあり方を探ろうとするものである。

●第8分科会 大学生の変化と大学教員の課題ー新たな「教育の評価」

基礎学力の低下、入試選抜方法の多様化による研究への動機付けや意欲の質的差異など、大学は「変化」したといわれる。学生の「現在」から「未来」を軸としながら、望まれる大学教育のあり方、あるべき大学教員像、そして大学教育の意義とその評価のあり方について検討する。

※詳細については、大学コンソーシアム京都のWebをご覧ください。
<http://www.consortium.or.jp/consortium/fd/fdindex.html>

申込方法

大学一括で申し込みを行いますので、2月10日までに参加申込団体内集計票を記入の上、大学教育開発センターまでお申し込みください。2日目の分科会は定員になり次第締め切ることがあります。希望の分科会の申し込みはできるだけ早くお願いします。なお、フォーラム参加費 ¥3,000 は大学負担としますが、情報交換会参加費 ¥2,000 は実費負担となりますので、申込時に現金でお支払いください。
なお、本学非常勤講師の方は個人で大学コンソーシアム京都のWebから直接お申し込みください。

2004年度

指定プロジェクト 自己応募プロジェクト 研究報告会



下記の日程で研究報告会を開催いたします。参加申込は不要です。関心のあるテーマのみ参加していただいても結構です。みなさまの積極的なご参加をお待ちしています。

「指定プロジェクト」は本学の教育活動の向上を目指し、センター会議で特に重要と考えられた3つのテーマ（「教育評価」「成績評価」「導入教育」）で、今年度より取り組みを開始した事業です。また、「自己応募プロジェクト」は教育改革を推進する一環として、学内の個人またはグループを対象に公募し、1998年度より取り組んでいる事業です。テーマは教育全般、授業、教材等の研究開発で、公開に対する支援を目的とし、今年度は12プロジェクトが実施しています。

- ◆開催日／2005年3月15日(火) 10:00～17:00
- ◆開催場所／深草学舎 21号館 404・405・407・408教室
- ◆発表者／2004年度 指定プロジェクトメンバー（全3プロジェクト）
2004年度 自己応募プロジェクトメンバー（全12プロジェクト）

テーマおよび研究代表者

■ 指定プロジェクト

- 教育評価 中沖 隆彦 理工学部助教授
- 成績評価 小島 勝 文学部教授
- 導入教育 田尻 英三 経済学部教授

■ 自己応募プロジェクト

- | | |
|---|----------------|
| ■臨床心理学領域におけるTA制度の確立 | 友久 久雄 文学部教授 |
| ■「学生実験の解説DVD」制作の試み | 林 久夫 理工学部教授 |
| ■経済英語の変革 —社会科学と英語学習への動機付け結合実験— | 谷 直樹 経済学部助教授 |
| ■学外教育資源との連携による教育効果と連携のあり方に関する研究
—校内での学習場面における導入を中心に— | 阪口 春彦 短期大学部助教授 |
| ■大学コンソーシアム京都 提供科目「里山学へのいざない」
：内容編成と講義報告集・ビデオ映像資料の作成 | 好廣 眞一 経営学部教授 |
| ■留学生別科の日本語授業のFD化プロジェクト | 北川 逸子 経営学部教授 |
| ■地元砂川学区との交流を通じた地域福祉実践学習 | 加藤 博史 短期大学部教授 |
| ■理工学部物質化学科「入門セミナー」の実施と必修化に向けた諸問題の解決 | 藤原 学 理工学部教授 |
| ■フィールドワークを活用した地域密着型授業の実施 | 井口 富夫 経済学部教授 |
| ■携帯電話コンピューティングを応用した教材の開発 | 樋口 三郎 理工学部講師 |
| ■大学英語教育改革実態調査 | 嶋林 昭治 経営学部助教授 |
| ■教養教育の評価に関する動向調査 | 上垣 豊 法学部教授 |

※なお、当日のスケジュールの詳細等につきましては、後日、大学教育開発センターNewsで案内いたします。

◆編集後記

2004年度第2学期（後期）の定期試験も終わり、学生たちにとっては春期休業が始まりました。大学においては、「2006年問題」や「大学全入時代」等の現実を解決するための検討が否応なしに進められ、今まさに龍谷大学が高等教育機関としての真の評価を受ける時代の到来といえます。さて、今年度も大学教育開発センターでは、各プロジェクト事業の推進、教育活動支援の学生による授業評価調査（授業アンケート）・カリキュラムアンケート（予定）の実施、教育活動交流としてFDサロンや公開授業の開催等々を実施して参りました。学生には、卒業式が控えているように、センターにおいても各プロジェクトのセンター研究報告会を上記のとおり予定しており、教育活動支援や開発の研究成果が新たな龍谷大学の教育の充実と発展に繋がるものと確信いたしますとともに、本センターおよび本センター通信が活用されますことをお願いいたします。

大学教育開発センター次長 井野谷文三